

鹿児島の植物26

大型草食獣と植生

植物担当 寺田 仁志

最近、霧島や屋久島を歩くと、森の異変に気付きます。下草や小低木もかなり少なくなり、遠くまで見渡せるふしぎな森が広がっています。木の幹を見ると、ひっかき傷や木の皮が剥かれたものを多数見付けることができます。また、とげのある植物やクワズイモ、ハスノハカズラなどの特定の植物が群落をつくっているところもあります。

そう、大型草食獣のシカによって森が変わってしまったのです。

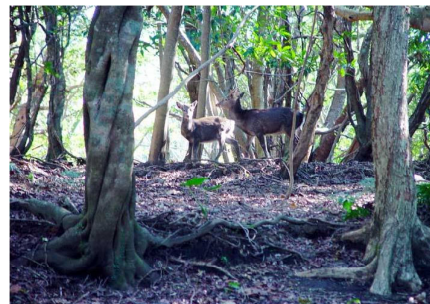
シカは昔からいた動物ですが、人が住む前まではオオカミなどによって、人が増えると猟師によって数がコントロールされてきました。

ところが、戦後になって猟師が減少すると、シカは増えました。シカが少ないうちは自然の回復力によって植物は芽を吹き、植生が変わることはありませんでした。シカが増えると、はじめのうちはシカにとっておいしいものを食べるので特定の植物は減少し、まづい

植物が目立つようになります。このため、とげのある植物や毒のある植物が残り特徴的な植生になります。

さらにシカが増え、いよいよ食べ物が少なくなるとまづいものも、ついには落ち葉なども食べるようになり、植生に大きなダメージを与えます。地形的に弱い場所では崖崩れを起こしてしまいます。

県内ではシカだけでなく放し飼いをされたヤギも植生を大きく変えています。ヤギは乾燥した場所を好むため、海岸の急傾斜地で植物を食べます。海岸の厳しい環境に生え、地盤を支えてきた植物が枯れると崖崩れが起こるのです。奄美大島やトカラの島々では、至る所に無惨な風景が見られます。



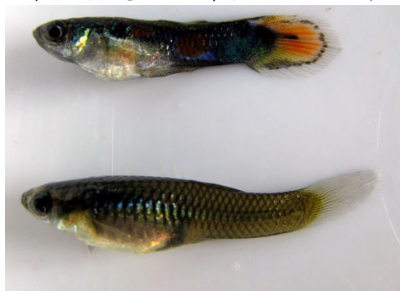
鹿児島の動物19

野生化したグッピー

動物担当 山田島 崇文

グッピーの名は、1858年頃イギリスの植物学者グッピーによって南アメリカで発見されたことに由来します。グッピーは「卵胎生」（らんたいせい）と呼ばれるユニークな方法で繁殖します。普通の魚はメスが産んだ卵がふ化して稚魚になります（卵生）が、グッピーのメスは卵ではなく、稚魚を出産するので、出産といっても、人間のように赤ちゃんとお母さんがへその緒でつながっているわけではなく、ある程度育った稚魚がお腹から出てくるのです。また、生まれてくる稚魚は、卵生の稚魚にくらべて、ずっと進んだ発育段階にあり、成熟する期間も短いので、成魚になるまでの死亡率ははるかに低いといわれています。

県内では、1970年代以降、霧島市姫城や指宿市二月田などで、野生



野生化したグッピー上が♂、下が♀

化しているグッピーが見られるようになりました。私は、これまでに霧島市3地点、指宿市3地点で確認し、そのうち5地点は写真のような下水溝でした。また、1地点は海水が混ざるところで、グッピーの塩分に対する耐性も強いと考えられます。しかし、低温には弱いらしく、いずれも温排水が流れ込む地点だけで見られました。



野生化グッピーの見られる下水溝（霧島市姫城）

メダカは、グッピーに比べて、繁殖力や水質に対する耐性が弱いといわれています。ですから、グッピーはメダカの生息環境を狭め（せば）ていると考えられます。みなさんもいつも行く銭湯近くなどの温排水が流れ込む場所などをのぞいてみましょう。もしかしたらグッピーが進出しているかもしれません。